

日曜に想う

編集委員
吉田 純子

うそのない言葉 探し祈る日に

「眩暈」というタイトルの、美しいドキュメンタリー映画を見た。コロナ禍が世界を覆う直前、詩人の吉増剛造さんは導かれるようにニューヨークを訪れる。前年に亡くなった友人の魂に「再会」するために。友人とは、映像作家のジョナス・メカスのこと。ナチスから逃れ、故国のリトアニアから米国に移住した。さすらい人の晩年の「生」の残像が、故人の息子と語り、その足取りを追う吉増さんの訥々とした言葉を得てゆっくり形を為してゆく。詩作とか芸術行為というのは、「わたし」が主役ではないのです。

（吉増剛造著『詩とは何か』）ハリウッド的商業主義に背を向け、あまたの前衛芸術家の闘いを肯定するメカスの作品は、実験と呼ぶにはあまりにも「わたし」を感じさせない。1972年の名作「リトアニアへの旅の追憶」は、27年ぶりに戻った故郷で覚えた多様な心の震えをそのまま綴じた、1冊のアルバム。さながら、度重なる手ぶれやフレームアウトが、語りきれぬ思いを強引に編集し、「作品」とすることへの抵抗と謙虚な羞恥を表している。多数の支持するものが勝利する資本主義の世界で、ささやかな日常に宿る真実を目をこらし、日記のように映像を撮り続けた。そんなメカスの人生と吉増さんの人生が共振し、「眩暈！メカス！」という一編の詩がぼろりと生まれる。吉増さんは、メカスが亡くなった部屋で、実際に眩暈を起こした。亡き人の生々しい命の手触りを「体感」する。そんな個人的な体験を、詩人としての吉増さんが強い意志をもって世界と共有

した瞬間、悲しみも感傷も超え、メカスの実在が突如立ち上がる。音読の最後、吉増さんは叫ぶ。「メマイ！メカス！」。言葉を音にすることは、魂呼びの儀式なのだを知る。指の間から水がこぼれ落ちるように、どんな真意も言葉では受け止めきれない。それでも吉増さんは、己の心にぐいと5本の指を突きつけ続ける。こぼれてもこぼれても、指先に残る水滴を集め、私のこの手でうそのない言葉を紡ぐのだ。その途方もない意志の力に、詩人として生きる吉増さんの矜持の全てがある。

2016年夏。あの日の日差しも強かった。神奈川の障害者施設、津久井やまゆり園の入所者19人が、突然命を絶たれた。献花台の白いユリが、じりじりと焦っていた。その1週間後、南仏の音楽祭を訪れた。86人が亡くなるテロが起きたばかりの街で、海岸沿いの公園はまごごとした祭壇に。多くの実名とともに、無数の手書きの文字が胸に飛び込んできて、立ちすくんだ。紙や布にしたためられた思いが、ひとりひとりの人生が、風に震えていた。なぜ亡くなったの。なぜ私は生きているの。悲しみの吐露が、自問を導



「一張羅」

絵・皆川明

戦争や犯罪は、人間にとつての最大の尊厳である「死」をないがしろにする。「死」の意味とともに、全ての豊かな「個」も死に絶える。人間の性の全てがそこで否定される。こつこつとした言葉の礫が、見知らぬ誰かを無作為に傷つけながら、今日もSNS上を飛び交っている。8月6日は、大切な人に手向けられるうそのない言葉を、世界の誰もが胸の中で静かに探し、祈る日であってほしい。友人の魂に手向ける言葉を、自ら探しに行った吉増さんのように。

く。雲ひとつない夏の空の下に、静かな祈りの伽藍が生まれていた。やまゆり園の敷地に設置された慰霊碑にも今、亡くなった19人のうち10人の名が記されている。ひとり、またひとりと新たな名が刻まれるたび、理不尽に殺められたのが「障害者のひとり」ではなく、それぞれの豊かな人生を生きていた「たったひとり」だったことに思いが至る。